

参加アーティスト 発表第一弾！

Yokohama
Paratriennale

ヨコハマ・パラトリエンナーレ 2014

www.paratriennale.net

2014年8月1日(金)～2014年11月3日(月・祝) コア期間 8月1日(金)～9月7日(日)

会場:象の鼻テラス

“障害者”と“多様な分野のプロフェッショナル”の協働から生まれる現代アートの国際展。
人々の出会いと協働の機会を創出し、誰もが居場所と役割を実感する地域社会の実現を目指す。

開催概要 ヨコハマ・パラトリエンナーレ 2014

テーマ: First Contact -はじめてに出会える場所-

会期: 2014年8月1日(金)～11月3日(月・祝) コア期間 8月1日(金) 9月7日(日)

会場: 象の鼻テラス

主催: 横浜ランデヴープロジェクト実行委員会*、特定非営利活動法人スローレーベル

共催: 横浜市、東アジア文化都市実行委員会

協賛: SHI/EIDO

後援: 厚生労働省(予定)、神奈川県

平成26年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ



*横浜ランデヴープロジェクト実行委員会・・・横浜市文化観光局、横浜市健康福祉局、スパイラル/株式会社ワコールアートセンター、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団、神奈川新聞社

2014年開催テーマ

『First Contact -はじめてに出会える場所-』

ヨコハマ・パラトリエンナーレの開催第1回目として「ファースト・コンタクト」をテーマに展示やパフォーマンス、ものづくりなど多彩なプロジェクトを展開します。

3年ごとの発展的開催を見据え、初回開催後も継続して各プロジェクトに取り組みます。

本イベントに関するお問合せ先: ヨコハマ・パラトリエンナーレ 2014 開催事務局
〒231-0002 神奈川県横浜市中区海岸通1丁目 象の鼻テラス内 (担当: 橋爪)
MAIL: info@paratriennale.net TEL: 045-661-0602 FAX: 045-661-0603

ヨコハマ・パトリエンナーレの特徴

■見たことのないアートを、横浜から世界へ

障害者と多様な分野のプロフェッショナルが会い、時間をかけて実験と挑戦を繰り返すことでしか生み出すことのできない新しい表現を、横浜から世界に向けて発信します。

■一流の伴奏者(アカンパニスト)を育てる

障害者の創作活動において、制作をサポートする「伴奏者」の存在が欠かせません。表現者自身だけではなく、その伴奏者にもスポットをあて、ノウハウの集積や人材の発掘と育成に取り組みます。

■障害の有無を越え、誰もが参加できるフェスティバル

一部の芸術的才能を持つ障害者だけが参加するのではなく、会場案内や広報活動、作品制作の補助など、フェスティバル運営に欠かせない様々な業務を、障害のある人とない人が協働して行います。

■誰もが住みやすいまちへのアクション

身体の不自由な方でも安心して会場までアクセスでき、楽しく鑑賞できるような仕組みを、障害のある人とない人が協働してデザインし、そのノウハウを実社会に応用すべく働きかけていきます。

■常識を再考するための足がかりに

社会の中で正しいとされている常識や既成概念を再考し、障害とは何かを根底から問いかけます。

開催会場

メイン会場は横浜都心臨海部、象の鼻テラスほか。ヨコハマトリエンナーレ会場とも相互来場可能な距離に位置する。

※ヨコハマトリエンナーレ会場と創造界隈連携プログラム相互巡回バス運行予定



キービジュアル

namiko kitaura 「revolution/recurrence -back to the source(原点回帰)」
 「障害」に対する我々の既成概念を本質的に捉え直し、新しい創造の可能性を探求する。
 パラトリエンナーレのコンセプトを視覚化する映像作品。



〈参考画像〉 namiko kitauraによるビジュアルイメージ

ディレクター略歴**栗栖良依 くりよしえ (フェスティバルディレクター)**

美術・演劇・イベント・製造と横断的に各業界を渡り歩いた後、イタリアのドムスアカデミーにてビジネスデザイン修士取得。その後、東京とミラノを拠点に世界各国を旅しながら、様々な分野の専門家や企業を繋げ、新しい体験価値の創造に取り組む。2010年3月、右脚に骨肉腫を発病し休業。2011年4月、右脚に障害を抱えつつ新たな人生をスタート。横浜ランデヴープロジェクトのディレクターに就任し、スローレーベルを立ち上げる。現在は、スローレーベルのディレクターとしてプロジェクト全般の企画開発と推進を担っている。

難波祐子 なんばさちこ (ヴィジュアルアーツ部門 キュレーター)

東京都現代美術館学芸員を経て、展覧会等の企画運営を行う株式会社I plus Nを設立。多摩美術大学非常勤講師。著書に『現代美術キュレーターという仕事』(青弓社)など。企画した主な展覧会に「こどものにわ」(2010年、東京都現代美術館)、「呼吸する環礁(アトール):モルディブ-日本現代美術展」(2012年、モルディブ国立美術館/スパイラル、東京)など。札幌国際芸術祭 2014 プロジェクト・マネージャー(学芸担当)。

田中未知子 たなかみちこ (パフォーミングアーツ部門 ディレクター)

札幌生まれ。北海道大学文学研究科・修士課程修了。在学中にフランス・リール第三大学美術史学科に1年間編入。新聞社在職中にフランス現代サーカスに出会い、サーカスを軸に生きることを決意。越後妻有大地の芸術祭、瀬戸内国際芸術祭にて舞台芸術担当。2011年に独立後、高松にて、サーカス×大道芸×地域芸能の発信基地「サーカス堂ふなんびゆる」始動。2014年に一般社団法人瀬戸内サーカスファクトリー立ち上げ、代表理事。

実施プログラム

※アーティストプロフィールは末尾に記載

エキシビジョン

■岩崎貴宏

障害者の手と心の動きの痕跡が印された布作品に、何気ない日用品から驚くほど小さくて精巧な作品を生み出すことを得意とする岩崎貴宏が紹介し、そこからさまざまな世界観が共存する新しい風景を創り出す。

〈参考画像〉

岩崎貴宏 Out of Disorder (Cony Island) 2012
Courtesy of the artist and ARATANIURANO



■真鍋大度+石橋素+照岡正樹+堤修一

振動や超低周波などを使用して触覚と聴覚など異なる感覚がクロスするような作品を生み出す真鍋大度が「目の見えない人のための映像と耳の聴こえない人のための音楽」の創作を目指す。この夏は、聴覚障害のダンサーとの共同作業で、触覚デバイスを使った《touch the sound》を発表する。

〈参考画像〉 真鍋大度

FaltyDL “Straight & Arrow”
Photo: Kazuaki Seki



■目【め】

「自分たちが知覚している世界とは別の世界を知覚できる臓器があったら？」という問いかけを基に、若手現代芸術活動チーム「目」が横浜市内で「障害者」に関するリサーチを行い、横浜市内の障害者と一緒に実験的なプロジェクトを展開する。

〈参考画像〉 目【め】

FICTIONAL SCAPER / 2013



■井上唯 × SLOW FACTORY

誰もが参加できるフェスティバルを具現化する要素の一つとして、市民参加型のものづくり SLOW FACTORY のコンセプトのもと、会場づくりを来場者とともに作り上げていく。構成を担うのは生活の知恵として育まれている「織り」や「編み」の手法を用いて、サイトスペシフィックなインスタレーション作品の制作を得意とする井上唯。形状保持の特殊繊維を編んで立体作品をつくる。

〈参考画像〉 SLOW FACTORY 開催風景

(2014年3月) Photo: 427FOTO



パフォーマンス

■ Chrissie 喜陽(Kiyou) & 高津会

障害のある人となない人による4日間の集中ダンスワークショップを実施。最終日に、ワークショップでつくった作品を発表する。

■ 金井圭介

知的障害やダウン症の人々など、多種多様な人々から成るパフォーマンス集団をつくる。
オープニングセレモニーや、期間中の週末を中心にパトリエンナーレ会場で来場者を楽しませるパフォーマンスを繰り広げる。ゲスト講師： Catherine Magis

プロジェクト

■ isabelle boinot × SLOW LABEL 徳島

天然灰汁発酵建ての製法を用いて藍染め製品をつくっている徳島県の障害者施設と協働し、日本の原風景をモチーフとしたキット商品を開発する。

〈参考画像〉 isabelle boinot
©DR



■ ダイアログ・イン・ザ・ダーク × 三角みづ紀

目が見えない人は何を頼りに街を歩き、何を感じているのか。
視覚障害者が感じることを、詩人が言葉に紡ぎ出し、案内サインを展開する。

参加アーティスト（4月22日時点）

namiko kitaura きたら・なみこ

1996年に絵画を学ぶため渡英し、その後渡伊。1997年写真に転向し作品制作をスタート、写真家として活動を続ける傍らミラノで視覚芸術・デザイン・美術史を、ロンドンでモダンアートを学ぶ。2003年から2005年までベネトンが出資するアーティスト・レジデンス「FABRICA」にて、日本人の写真家として初めてスポンサーを受ける。国内外の有名ブランドやファッション誌の広告を多く手掛ける傍ら、社会に潜むさまざまな問題と向き合い、その裏に潜む言葉にならない感覚を独自の撮影手法で視覚化した作品を発表している。

岩崎貴宏 いわさき・たかひろ

1975年広島生まれ。シャーペンの芯、タオルやシャツなどから引き出した糸などを用いて、鉄塔や観覧車の形をした繊細な構造物を創り出すなど、日用品や既存の環境を解体し、思いもよらない形で再構築する作品などを制作。リヨン・ビエンナーレ(フランス、2009)、アジア太平洋現代美術トリエンナーレ(オーストラリア、2012)、アジア・アート・ビエンナーレ(台湾、2013)など世界各地の主要な展覧会で発表している。

真鍋大度 まなべ・だいと

プログラマ/メディアアーティスト。

1976年生まれ。東京理科大学理学部数学科、国際情報科学芸術アカデミー(IAMAS)卒業。

身近な現象や素材を異なる目線で捉え直し、組み合わせることで作品を制作。高解像度、高臨場感といったリッチな表現を目指すだけでなく、注意深く観察することにより発見できる現象、身体、プログラミング、コンピュータそのものが持つ本質的な面白さに着目している。

石橋素 いしばし・もとい

エンジニア/アーティスト。1975年生まれ。東京工業大学制御システム工学科、国際情報科学芸術アカデミー(IAMAS)卒業。在学中、当時発売されたばかりの加速度センサーADXL202を使い、画面を傾けて遊ぶ『G-Display』を瀬瀬大輝と発表。卒業後は、フリーランスとしてファッションブランドの店内インストールやレセプションパーティーでのインタラクティブ装置を数多く制作。また、ショールームや科学館などの常設展示のインタラクティブシステムのデザイン・制作を行う。2008年、真鍋大度と4nchor5la6を設立。デバイス制作を軸に、数多くの広告プロジェクトやアート作品制作、ワークショップ、ミュージックビデオ制作など、精力的に活動行う。

堤修一 つつみ・しゅういち

1978年生まれ。京都大学大学院にて信号処理を学び、NTT データにて音声処理、キヤノンにて画像処理を専門として研究開発に従事。その後カヤックにてiOSアプリ開発者となり、フルスクラッチで30本以上のアプリを開発しリリースする。カンヌ国際広告祭やAppStore Best of 2012等受賞多数。書籍「iOSアプリ開発 達人のレシピ100」執筆。現在はフリーランス。BluetoothLEを用いて外部デバイスと連携するiOSアプリを多く手がけている。

照岡正樹 てるおか・まさき

学生時代からインスタレーション制作や、レーザー照明の開発をおこない、1998年にメディアアーティストの長嶋洋一氏らと芸術・技術系の同人「VPP」を結成。その後、さまざまなジャンルの共同制作、研究・開発をおこない、あるいはメディア系の作品制作の際の技術的なサポートをおこなう。触覚系全般、低周波空気振動、生体情報のセンシングを主軸に、生理心理学的側面から生体情報のアート表現への活用を模索している。

目【め】

アーティスト荒神明香と wah document らによって組織された現代芸術活動チーム。2012年より活動を開始。鑑賞者の「目」を道連れに、未だ見ぬ世界へと直感的に鑑賞者の意識を誘う作品を構想する。瀬戸内国際芸術祭(2013)参加、個展に「状況の配列」(三菱地所アルティアム、福岡)など。

井上唯 いのうえ・ゆい

1983年愛知生まれ。“織”から始まった興味が、次第に空間へと広がり、特定の場に対してモノをつくることにおもしろさを感じるようになる。また移動生活を楽しむ一方で、ひとつの土地に根差してしかできないことがあることに気づき、湖と山と川に惹かれ滋賀県に移り住む。生活のなかでやりたいことと、制作とが繋がってくるとおもしろいなど思っている。

Chrissie 喜陽(Kiyou) & 高津会 クリシー・キョウ & たかつ・かい

Chrissie 喜陽:ダンサー、振付家。コンテンポラリーダンス、Matt Mattox ジャズ、アフロ・カリビアンダンスなどを得意とする。

2008年北京オリンピック・パラリンピック閉会式にはカンドゥーコダンス・カンパニーと参加し、ダンス指導や振付を行ったほか、出演も果たす。他にも、プロフェッショナルはもちろん、障害者や子どもなど幅広い対象にダンスを伝えている。

高津会:ダンサー、振付家。イギリスの Orpheus Centre(障害者施設)で子どもたちや大人にダンスを教え、障害者との交流や創作の経験をもつ。

金井圭介 かない・けいすけ

2002年フランス国立サーカス大(CNAC)卒業後、フィリップ・デュクフレ演出のサーカス『CYRK13』で2年間のヨーロッパツアー。その後フランス人とのサーカスデュオで、5年間ヨーロッパ、中東、アフリカなど36カ国で公演。2009年帰国。ミッフィーCD「パパとサーカス」監修、Tact 国際児童演劇祭「TACT2013」参加。舞台、大道芸など、あらゆる場所で奇想天外に活躍中。パフォーマンスグループ「くるくるシルク DX」のメンバー。

Catherine Magis カトリーヌ・マジ

サーカスの身体と演劇的表現を追い求め、演劇学校やコメディアデラルテの学校に通ったあと、世界一流のカナダのモントリオール国立サーカス学校で学ぶ。ベルギーに帰国後、サーカス創作の環境がない状況に直面し、自ら創作施設「エスパス・カタストロフ」と、カンパニーを立ち上げ、演出家としても活躍。2008年から、知的障害のある人々とのサーカスプロジェクトを開始。

isabelle boinot イザベル・ボワノ

書籍や手帳、チラシのデザインや制作、イラストや写真、コラージュを使った作品、オブジェの装飾、挿絵など、多彩な活動を行っているパリ在住フランス人アーティスト。彼女の作品は、従来の流通の枠外で紹介・販売されている。コンテンポラリー・グラフィック・アーティスト・グループ「Frédéric Magazine」の創設メンバーの一人として、展覧会や雑誌に関する様々なプロジェクトにも参加している。

三角みづ紀 みすみ・みづき

1981年鹿児島生まれ。東京造形大学在学中に現代詩手帖賞、中原中也賞を受賞。執筆の他、朗読活動も精力的に行い、スロヴェニア国際詩祭やリトアニア国際詩祭に招致される。近時の主な活動は坂本美雨らに歌詞を提供、第55回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館におけるプロジェクト『a poem written by 5 poets at once』に参加。『連詩 悪母島の魔術師』にて第51回藤村記念歴程賞を受賞。あらゆる表現を現代詩として発信している。

ダイアログ・イン・ザ・ダーク

みえない、が、見える! まっ暗闇のソーシャル・エンターテインメント『ダイアログ・イン・ザ・ダーク』。世界30か国・約130都市で開催され、日本では1999年より14万人が体験。参加者は完全に光を遮断した空間の中へ、グループを組んで入り、暗闇のエキスパートであるアテンド(視覚障害者)のサポートのもと、中を探検し、目以外の感覚をフルに使うことでコミュニケーションをとりながら、様々なシーンを体験する。